独立行政法人国立青少年教育振興機構　国立赤城青少年交流の家
「　青少年自立支援者のための研究交流フォーラム　」

実　践　事　例　集

事例No.　8

本事例についてのお問い合わせは
主任企画指導専門職　牛島昌哉
までお願いいたします

団 体 名 （ 個人名 ）	独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立山口徳地青少年自然の家
団体(個人) 所 在 地	〒 747－0342 山口県山口市徳地船路６６８
TEL番号	０８３５－５６－０１１２
FAX番号	０８３５－５６－０１３０
メールアドレス	tokuji@niye.go.jp
記載者の職・氏名	主任企画指導専門職

○実践のあらまし

【事業名】「ウイズ　ユア　スマイル　～君の笑顔はすばらしい～」
［発達障害のある子どもの自然体験・生活体験・交流体験事業］

1．目的　自然体験や生活体験，及びスタッフや同じように障害のあるものとの交流体験活動をとおして，以下の2点を目的とする。
・発達障害のある子ども達が安心して自己表現（活動）できるような居場所をつくる。
・発達障害のある子ども達のセルフイメージを高める。

2．目標【子どもにとって】
・自分を認めてくれる人がたくさんいることを知り，自分を大切に思うことができる。
・安心して笑顔で活動し，仲間と自然の家で活動することを楽しみにする。
【保護者にとって】
・子どもの活動の様子から成長の喜びを感じるとともに，保護者自身の自己肯定感を伸ばす。
・カウンセリングや情報交換をとおして，家庭での子どもの支援に生かす。
・保護者間のネットワークを形成する。

3．期日【第1回】平成20年　7月　6日（日）　［日帰り］
【第2回】平成20年　9月　7日（日）　［日帰り］
【第3回】平成20年11月　9日（日）　［日帰り］
【第4回】平成20年12月　7日（日）　［日帰り］
【第5回】平成21年　1月24日（土）～25日（日）　［1泊2日］

4．対象　発達障害［LD・ADHD・高機能自閉症等］のある子ども（小学3年生～6年生）
定員　15名程度　（原則として通年参加）

5．ボランティアスタッフ　学校教員，山口大学教育学部学生，山口県立大学社会福祉学部学生

○実践の内容

回	子どもプログラム	ね ら い	保護者プログラム
1	○出会いのつどい ○アイスブレイク「みんなと遊ぼう」 ○昼食 ○自然散策・フィールドビンゴ ○ふりかえり ○終わりのつどい	初めて出会う仲間やスタッフと活動しながら，環境になれる。 ⇩	○出会いのつどい・「みんなと遊ぼう」参観 ○事業説明会・昼食 ○講義「発達障害のある子どもの支援」 ○終わりのつどい参観 ○ボランティアとの話
2	○再会のつどい ○アイスブレイク「みんなと遊ぼう」 ○土と遊ぼう（萩焼）；共同作品作り ○昼食 ○土と遊ぼう（萩焼）；個人作品作り ○ふりかえり・ ○終わりのつどい	仲間やスタッフを意識しながら活動し，自分の居場所があることを感じる。 ⇩	○再会のつどい参観 ○座談会（グループワーク形式） ○昼食 ○個別カウンセリング・座談会 ○終わりのつどい参観 ○ボランティアとの話

3	○再会のつどい ○アイスブレイク「みんなと遊ぼう」 ○野外炊飯（昼食） 「ぽんぽら飯」「豚汁」 ○ふりかえり ○終わりのつどい	仲間やスタッフとの活動や交流をとおして，自分や仲間の良さを見つけようとする。 ⇩ 仲間やスタッフとの活動や交流をとおして，仲間の良さを見つけるとともに自分の存在意義を確かめる。 ⇩ 1 年間の活動を振り返りながら，仲間やスタッフとのつながりを確かめ合うとともにこれからの生活に意欲を持つ。	○再会のつどい参観 ○懇親会Ⅰ（テーマ別） ○昼食 ○懇親会Ⅱ（フリー） ○子どもの活動・終わりのつどい参観 ○ボランティアとの話
4	○再会のつどい ○「徳地アドベンチャー教育プログラム」（TAP） ○昼食 ○TAP ○ふりかえり ○終わりのつどい		○再会のつどい参観 ○「徳地アドベンチャー教育プログラム」（TAP） ○昼食 ○TAP～小講義 ○終わりのつどい参観 ○ボランティアとの話
5	○再会のつどい ○冬の自然を感じる活動～TAP ○読み聞かせ会 ○ふりかえり・宿泊生活 ○ありがとうパーティー準備 ～昼食～片付け ○ふりかえり ○感想発表会・旅立ちのつどい		【1 日目】 ○再会のつどい参観 ○個別カウンセリング ※宿泊希望者は保護者間交流会 【2 日目】 ○学習会「進路・進学について」 ○ありがとうパーティー参加（昼食） ○感想発表会・旅立ちのつどい参観 ○ボランティアとの話

○まとめ

この事業は、日帰りから始まり、第5回で1泊2日の共同生活を行う通年型事業とした。これは、参加する子どもたちに負担がかからないようにし、居心地の良さを実感してもらうことを大切にしたからである。

通年型事業の良さは、次の二点をあげることができる。

① 子どもが次第に事業環境（仲間やスタッフとの人間関係・支援の基本方針・施設環境や利用法等）に慣れ、自分の思いを行動や言葉で表現しやすくなる。

② ボランティアスタッフが子どもの個性を順次把握でき、子どもに適した支援を行いやすくなる。

このようにして、自然体験等を通して一人ひとりの個性を大切にしながら、適切な支援を行うことで事業目的を達成できるようにした。

さらに、事業を進めるにあたり、本所の「ウリ」である「徳地アドベンチャー教育プログラム」（TAP）を生かして子どもの学びを支援した。第2回からは、活動や生活の目標を設定し、体験後の『ふりかえり』において「できたこと」や「できなかったこと」、「次に生かしたいこと」を意識させるとともに、第4回からは、お互いのことを大事にする環境を築くためのプロセスとしてビーイング（グループにとっての大切にしたい言葉や行動、なくしていきたい言葉や行動をみんなで考え、書き記した掲示物）を作成し、「仲間の良さを見つける」ことを目標として活動を展開していった。その結果、子どもたちは安心できる環境の中で、仲間と関わる活動や仲間と協力していく活動を少しずつ達成できるようになり、仲間とともに活動する喜びや充実感を味わえるようになってきた。その達成感や充実感が参加した子どもたちの自信につながり、自己肯定感の向上につながるものと信じている。